

演題：「ホスピスで『いのち』を考える」
(平成 26 年 10 月 10 日 池永 昌之 先生)

連続講座で初めてホスピスというものの存在を知りました。大きな病院に行く機会は滅多にないが、自身の目でホスピスを見たことはまだありません。

ホスピスはがん患者がその人らしい生を全うできるように援助され、まずは患者の苦痛を出来る限り軽減できるように努力されると同時に、家族が苦痛を伴うこともあることから、家族への配慮もしておられるようで、一般病室で最期を迎えるのとでは患者や家族、医師それぞれに感じ方が違うのだと思いました。

ホスピスの患者には当然いろいろな境遇の方がおられます。いくつかのケースをお話頂いた中で、ある患者さんは「こんな体になって。みんなに世話にならないと生きていけなくなって。家族に迷惑をかけるぐらいなら、生きていてもしかたがない。一層のこと早く死にたい。」と仰ったそうだが、同じ境遇であれば、助からない先の見えた命に対し、周りの人に迷惑やお金もかけたくないの、恐らく同じように「早く死にたい」と思うであろう。しかし、「早く死にたい」と言う言葉は医者として一番言われたくないそうなので、いくらそう思っても、一生懸命に支えて頂いている医者には言うべき言葉ではないと思った。

一番印象に残ったのが、お母さんと二人の子どもの画像が出てきたケースでした。まだ小さいお子さんに先のある命をどう伝えるかという事。先生は「生きているものに必ず訪れる死ということを理解させることが大切である。特に子どもに十分な説明をしていないと「僕がいうことを聞かないから？」といったように自分のせいでと考えてしまう。子どもに分かるように伝えることは子どもにとっても大切なこと。子どもも家族の一員として考えてほしい。」と仰いました。父親を突然死で亡くしましたので、このように最期が近付いているケースと違い当然伝えられずに逝きました。死後 17 年経ったいまでも「なぜ？」と思います。もし、自分の最期の時が分かっているケースならば、命についてたくさん子どもに話をし、父親がなぜこのまま死んでしまうのかを子どもに充分理解をさせた上で逝きたいと思います。そうすることで、「なぜ？」と引きずる事なく、死を理解し、前を向いて生きて行ってくれるものだと思います。

とは言え、看病をする家族は大変なことであるのでしっかりと苦勞を認めてあげる事も周りの者は忘れてはならない事だと思います。

死に逝くまでの深い時間を共に過ごせるホスピスの存在を、より多くの方に知ってもらうことは、患者と患者に関わる人に、より「いのち」について向き合える時間を過ごせる場があると周知する為にも大切なことであると思いました。